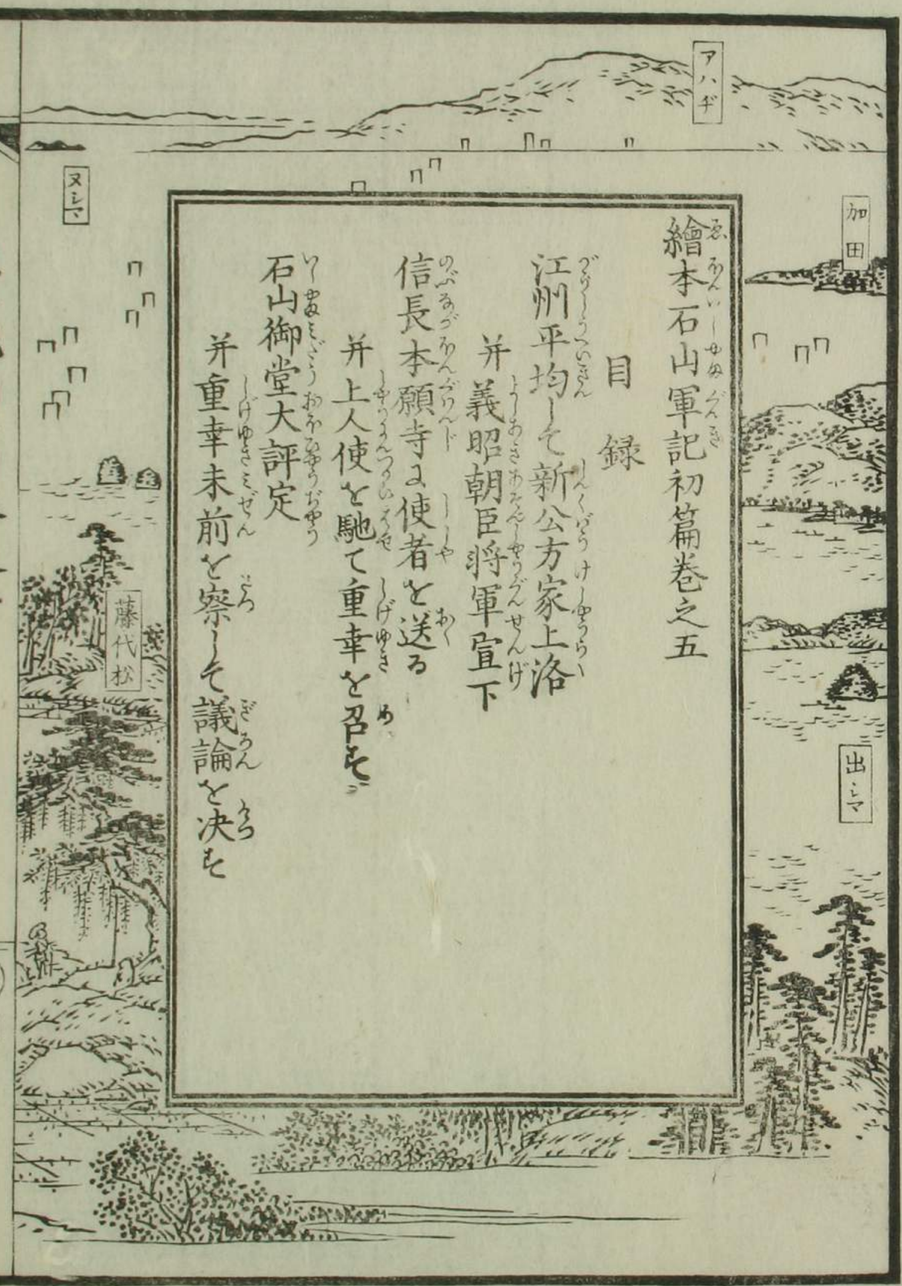
土屋正義編輯

# 繪本石山軍記

五

遠性
2269
5

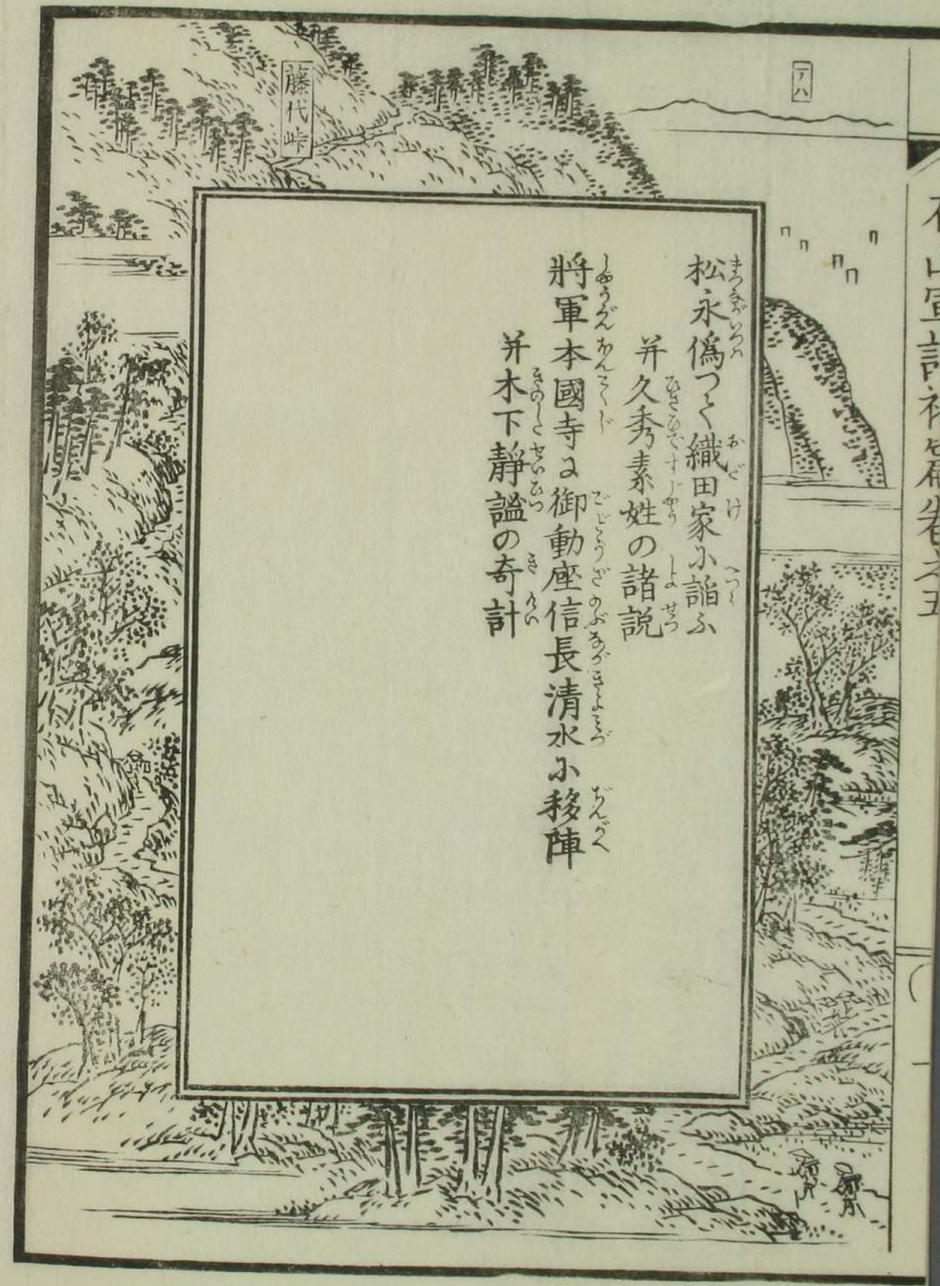
2269
5




# 繪本石山軍記初篇卷之五

目録

江州平均して新公方家上洛
　并義昭朝臣將軍宣下
信長本願寺へ使者を送る
　并上人使を馳て重幸を召る
石山御堂大評定
　并重幸未前を察して議論を決る




松永偽つく織田家ふ詣ふ
并久秀素姓の諸説
将軍本國寺ゑ御動座信長清水ふ移陣
并木下静謐の奇計

# 繪本石山軍記初篇卷之五

土屋正義　編輯

江州平均して新公方家上洛并義昭朝臣將軍宣下

善人の榮る事い春園の草木ふ喩へ悪人の滅ぶる事いカを磨ぐ石の如し。日々ふ勵ろと故人の謂ろが如し。六角承禎父子逆臣ふ屬し織田の義兵と支んと所々ふ要害を堅むといへども是ふ敵もる事能いど箕作山和田山い暫時ふ滅び承禎父子い石部ふ退き守山の種村ふ討死ど頼ととせし。浦生父子まぐ降参して観音寺ふ出仕し。多賀長光寺草津の砦ふ籠ろし輩幾ど力を落し。今い左右叶ふまじとそ皆々城と明て退去し。山林ふ身を隠をかぐふ湖水を隔てし西近江宇

治山堅田其余の城々ゟ楯籠る者ども織田の軍威さんあるて。利刀の竹を破るが如き勢ひなりと聞畏して未だ其旗の手をも見ざるゟ悉く降参せるゝ。佐々木六角の枝城十八箇所ゟ三日の内ゟ落去して江南江西一時ゟ平均して京都までの路閑けぬるゝ。新公方家を迎へ奉るべしとて不破河内守を濃州ゟ遣り。義昭君へ江州軍の次第を注進し去程ゟ急ぎ御動座あるべき由言上ゟ及びゝ。新公方家主従の悦び譬んゟものなし。同月廿一日濃州の御旅館立政寺を御発駕まゝ大館長岡三淵上野仁木和田等以下御供ゟ召具せゝ廿三日江州守山に着御あり。是い信長木下に命じ仮の御座所を補理あるゝ故なりとぞ。信長観音寺ゟ守山へ御先へ罷越て御着を待奉り御目見へ。江州斯のごく平均の上い御上洛ゟ遠ゝ候ふと御悦び申上ゟ義昭君仰出さるゝ様抑營再興の計畧ひとゝ信長の手ゟあり感悦斜ならずと有ゝ。信長謹んで是と申も先代将軍家尊霊の御加護ゟい新公方家御孝心深きゟ致ものゝ。信長何の軍忠ゟ候へさ是ゟ後も君の御威光を頭ゟ戴き尚諸士の勇武を勧め申へく候ふと言上ゝ次ゟ蒲生右兵衛大夫を御目見へと推挙ゝ蒲生を召出さを退去の後降参の諸将追々御前を免さを本領安堵の御朱印を賜ふ信長廿三日観音寺を出馬あるゝ湖水を打ゝ勢田ゟ止宿ゝ。廿五日三井寺極楽院を本陣ゝあゟ諸軍勢い大津馬場松井山科醍醐宇治ゟ

京師の町人等
御上洛を賀す

織田上総介信長朝臣新公方家を守護して上洛あり東山東福寺ふ本陣を居らるゝが洛中洛外の諸町人并ふ諸藝ふ名を得し者ども献上物とりどりを群参して門前ふ市をなし御上洛を賀し御礼を申上奉る信長木下が勧め申さるゝ隨ひ丁寧ふ對面あって懇の御詞を下され

ども一統大ふ悦び實帝達の大將ろくと憂ざる者いかりろくぞ其中ふ医師ろく通仙軒驢菴曲直瀬道三連歌師ろく紹巴同門人昌叱と閑白紹巴い扇子二本を臺ふの名自身ふ是と持参し御礼申されば信長御覧あって此扇を取上あい二本ともふ手ふ入れあるべきことなりて是ふ付らくと有しを紹巴とりあへず

まつく千代万代の扇にて

と付奉れば信長殊ふ感悦なり

邊ふ透間もなく陣を取る斯有り程ふ三好三人衆い京都ふ溜まう孫。
摂州ふ引退き中るも岩成主税助い山城国西の岡青龍寺の城ふ一千
餘騎るく楯籠る入江左近い摂州島上郡高槻城ふ八百餘騎ふ籠り
籠りるく芥川の城るい三好日向守長縁入道北齋二千餘騎るく
籠城を武庫郡小清水の城るい篠原右京進一千餘騎るく守りるう。
菟原郡布引瀧山の城るい三好方四國の軍兵を籠とき島上郡富
田普門寺るい細川掃部助真之三好彦次郎を大將として三千餘
騎將軍義榮朝臣を守護して威を示す。実い當九月五日義榮君腫物を憂
秘して披露せず。豊嶋郡池田の城るい池田筑後守勝政河邊郡伊丹の城ふ
伊丹大和守親興尼ケ崎の城るい荒木信濃守村重河内國讃良郡飯盛



山の城るい三好下野守政康古市郡高屋の城るい三好山城守康長
入道笑岩楯籠る摂河両国三好ふ一味して。信長の大軍を防ぐと
待懸さう。斯の加く三好の徒摂州へ退去せるば義昭朝臣守山を
御立あるく。廿七日晩景ふ三井寺光淨院へ着御まるも翌廿八
日信長路次の行粧嚴重ふ執粧ひ。新公方家を守護して入洛ぬ。
先陣後陣長路ふ列足ー蹄い石路を轟ー旌旗い山野を掠め元暦
の昔東源平家を追討の都入元弘の中頃るい東夷滅ぶく後醍醐
天皇船上ふう還幸まるも粧ひ永禄の今い義昭朝臣御飯洛の
形勢つづきう多ると京中の貴賤眸を翻ー偖も彼平信長い鬼神の
威をの修羅王が通力を得る大將ろ江源佐々木を唯三日の中ろ

追落し日を経ずして都入あるべきと怖しるまと皆町架の扉を閉
潛り返つゝ謹しまる義昭朝臣い洛東清水寺を仮の御所とす
給ひ織田殿ゑい東福寺を以て陣所と定めらまと頓て莨谷九右衛門
を以て軍勢甲乙人洛中洛外乱妨狼藉押買をぐるぐる音を觸るゝ
さまを聽て天下草創の為上洛の趣を傳奏廣橋大納言國光卿を
以て叡聞ふ達せゝまる誠ふ勅感斜なるを洛中洛外御恩下の武
士諸侯大夫諸卿百官神官僧侶出仕し或い使者珍宝名馬酒肴を献
ず寺門ふ市をなして充満し太平の賀儀を勤め圍繞の蹄門を掠
め偈仰衣冠堂上を犯せば諸軍今い欝憤の鋒を横へ皈家穏座の眉
を發け太平賀象の床ふ休ひるるぞ愛度ゑん時ふ岩成主税助も青



龍寺の城を退き摂州芥川の城ふ約まり三好日向守と俱ふ籠城せが
伊丹荒木両將ゑりふ降参して御味方ふ馳加り富田普門寺の細
川三好も本國阿波ふ落下ゑ程ふ三好日向守も城をひらきて同阿
波へ志し出帆を高槻の入江降旛して本領を安堵し河内の飯森高
屋の両城も退去しふ清水布引瀧山も退城しるまべ芥川ふ落止ま
つる岩成主税助も心い頗る強なりといへども我一人ふく爲方なく四
国とさして落行しゝば池田筑後守も終ふ御味方ふ降参し摂河両
国忽ち平均し洛中洛外静謐ふなりるまべ新公方家御参内あるべき
ゝ信長申沙汰し奉つゝく十月十八日義昭朝臣参内あるべく從
四位下ふ叙せゝまる参議左近衛中將ふ任じ征夷大將軍の宣下を

賜ふ天下の武將ふ備ふあふ是い前將軍義榮朝臣既ふ摂州普門寺ふ於て逝去まゝ㆑ふ依てゝ此時信長の勲功第一とゝ以て左兵衛督ふ任ぜらるべき旨御氣色ありつゝも信長固く辞退あらるゝ僅ふ從五位下ふ叙せゝ彈正忠ゝぞ称せゝ㆑ゝ織田家の繁榮ゝふ發ゝ

信長本願寺ふ使者を送ゝ并上人使を馳て重幸を召ゝ

織田彈正忠平信長武威恰も猛虎飛龍の如く向ふ所敵なく英名遠近ふ轟き信長が日頃の志望大半達せ㆑程ふ此時節ど失ぬ。年來遺恨を含ゝ㆑摂州石山本願寺を責崩㆑頭如父子ど首を見んと即時ふ軍勢を差向ん㆑給ひ㆑ど無名の軍をゝ本願寺と攻けゝ㆑ぶ㆑て。先村井民部不破河内守両人を使者ゝ㆑て石山本願寺ふ言㆑遣いゝ㆑ゝ其演舌の趣ゝふい信長今般新將軍義昭卿を守護㆑奉り逆徒三好ど一類と誅伐のゝめ義兵の旗を上て上洛ゝる所ふ逆敵等我軍威ふ恐ゝ遠く南海の地ふ退散㆑帝都ゝつ㆑く静謐ゝふ似ゝりとゝ㆑ども凶徒等いまど誅ふ伏せぬ渠等又軍兵と集め悪黨を語らい再び上國㆑て將軍ふ仇をゝ京洛を騒ゝさん事必定ゝ。信長熟思ふふ石山の地ゝそ武を用ゆるふ究竟の要害ゝ此所ゝ堅固の一城と築き四国の三好一黨をゝ㆑め中国九州の朝敵を押へ皇都を平安ゝ㆑め上い帝王の宸襟を休め將軍の尊慮を穩ふ

信長台命を今して四方の逆徒を平げ下萬民の塗炭をすくひ天下泰平の計畧を爲んと欲せ是併ら足利家再興の計議なまべ辞退あく速ふ當寺を退去し外ふく宗旨繁昌の土地を見立木願寺造立あるべし信長も一臂と成て俱ふ營を助くべし上使の趣き斯の如しと演舌ひう使者の應對の坊宦下間少進謹んで答ふい仰の趣き一々兼ねて候ふ是ハ當寺ふ於て一大支の御事と存て候へば御諚の旨上人へも言上つて寺中一統衆議のうへ是ふう使者を以て御返答仕る間此儀宜く御披露を頼ミ奉らるるとて村井不破の両使を京都へ帰し偖上人の前ふ出て事の始末を詳ふ言上まい顕如上人大ふ驚きあひ當寺ハ中興開山蓮如上人の開基ふて宗門繁昌の霊地なり是を他邦へ移さんと甚以て歎ふ。然ま共信長ら所望あるを固辞あべ原來腹黒ふる強氣の大將いうの騒ぎ出來して宗門退轉の端とあんも知べ〻此返答を當寺の浮沈ふくいまい一應ふくい究め難し寺中ハ勿論近国近在の門下を集め評定の上其宜きふ從ふべし就中紀州藤白の住人鈴木源左衛門重幸ハ世ふ稀なる智勇の士なり別使を以て招きふて其計畧を尋ねべしと宣ひる下間少進委細ふこまう俄ふ廻文を認めて近国の門徒を集め且使者を以て鈴木重幸をも召ふせる。ふ有ハ摂河泉の門徒等是を聞ふ騒動し驚破御本寺ふ支あるく我々を召寄御門主様の御相談あるまま度との御事とやあ勿躰ふや

冥加なるや有うらん御宗旨の御流れを汲むべうて是非を辨へぬ愚なる上百姓を御門下と思しめ。人並ふ召寄らるゝも他力本願の御誓ひ浅うぬ御慈悲ぞや時刻うつて勿躰なしと鋤も田中ふ打捨つゝ我先うと道場ふ集り一文不通の尼入道老うも稚きも男も女も嘆も娘も丁稚飯炊下僕雲霞の如くもて〻〻打連く本山さして急ぎ行を講頭の宿老去ぐと止め御本山うう召さるゝ譯ハ何事ゝハ知らねとも斯大勢参つるくい御本寺の齊料も容易うゝ然まいまゞ表立さる者うう小勢うう参上御門主の仰を羨りし上うゝ若も人數の御入用との儀ふ有るハ其時急ぎ馳参るべし重ねく御下知あるまくい婆く嬢ども仕



業を積うゝ布るる支又機拵をど必ず共ふ為べうゝ何時召しうゝ計らまゞと夫々に言関せう村々の長人のを本願寺へ参つる儲亦鈴木重幸も急使ふうく取敢ず藤白を立て石山うゝ赴さうう抑此鈴木源左衛門とうハい紀伊国海部郡藤白の住人ゝく姓い穂積其先祖い鈴木庄司重倫の嫡子鈴木三郎重家（源義経の功臣）たり。源左衛門重幸天性智勇王佐の英才あるく胸中ふ孫呉が兵術を藏め子房孔明が謀略を掌うを然まゞども若冠の時うう高名富貴を願ゝゝて藤白の閑居ふ月雪花を翫び山水の清音を甘んゞ只管世事をいうふの余り佛道の深理うゝふ心をとゞめ其家原うう鸞師の門葉ふ連まゞ暇ある毎ふ石山ふ詣で顕如上人ふ謁して佛の金言を歓

本願寺大評定の圖

頭如上人

山田三良大夫





下間頼廉

鈴木重幸

び道の高き事を論ぜ顕如上人も重幸が高才を愛し。理義明らかなると賞し給ひ一方の[illegible]なりとぞ[illegible]あふ亦有ねどふ此度急使を以て招きめふ所なり。重幸石山の御堂ふいたり席ふ列なりて其動静を窺ふふ本願寺の坊官家老用人を首として近國近在の門徒又い末寺の僧侶等夥しく集り來つるさまふ廣き御堂ふ居余り。膝を重ね袂を交へ何度の議論ゆんと息を詰て待居たり

石山御堂大評定并重幸未前を察して議論を決せ

抑石山本願寺の境地とふい摂州東成郡生玉の荘ふあるく巖石ちいく岨ちく其方廣大なる丘山なり故ふ以て俗ふ石山と号せ亦東北あい大和川河内川の流を漲り來つる洋々たる淀川ふ合し西ふ落て海ふ入又半途より横ふ南ふ廻り百濟川の下流ふ會して堀江の川より西ふ流まるく海ふ入る東い百濟川の枝北ふ周りるく大和川ふ合流し且東の川邊い一圓の大沼ふて人馬の足を立ん度能りぞ四方の要害かくの如く此ふ堅兵楯籠り軍師奇計を施こさい如何なる大軍寄來るとも容易落ち事を得べうふ実ふ世ふ雙びなき勝地なり去程ふ信長うて遺恨の本願寺を滅し此ふ堅固の一城を築き南海中國西演を切鎮めんとの軍慮なりさまでば上人の召ふ隨ひ近国近郷の門徒末寺の僧侶雲霞の如く群集て御堂狹しと列居さり。此時顕如上人内陣ふ出させあい織田家よりの使者の趣き詳らふ物語り。両眼ふ御涙を浮めあい如何返答せば可あらん哉我

更ふ其應への言語を辨へもうゆゑ門下の衆中を招きうせ衆議多評の上うく返答せぐやと今日の會合ふ及ひうう人々の心底聞まうゝと有るまバ一座の人く門徒の面々互ふ顔を見合セて暫し時詞も出ざうう時ふ山田三郎大夫とりゝる侍進ゝ出て申うう其不肖うゝ候へゝも所存申上ざるも罪深く候へい愚案を申候へ信長原來新曲不信の大將みて今般將軍義昭卿を楯ふさし拠を無躰ふ上人を追退け終うい當宗門を破却せんとの下心なうと覺へ候ふ忝くも當山い聖德皇太子の御告ふうく。蓮如上人御草創まゝ佛縁の靈地ゐるを信長が暴威ゐ懼ゐ退去ゐゝあらん哀余ゝふ本意ゐき御哀ふ候ゐ哉一應も再應も御辞退ゐて然へうんと席を進んで言上ゐ上人是を聞て宜く汝が言ゐ條所理ゐふゐ絲ども意地強ゐ信長一且申越ゐる儀ゐ辞退ゐきべゝく。其が儘ふ止べゝ哉即時ふ軍勢をゝむけ當寺を攻潰さんと謀ゐ。介有ゝゝゝ宗門の障ゝゝゐう自然當宗退轉ふ及べゐゐ開山聖人積年の御苦勞も水上の泡と消ゐて我等が未來無間地獄ゐ墮ゐべゝ。我い唯信長が望ゝふ任せ退去して土地ゐ與へ宗門不退轉の計畧ゐ肝要ゐゝゐ思へと仰ゐるふ坊官下間刑部法眼頼廉目ふ角ゝて上人の御仰ゐ背ら愚臣が所存ゐ齟齬仕ゐ候ふたゝ信長怒ゐく攻寄ゐゝも何条恐ゐく哀哉ゐん既ゐ加賀の富擬能登の畠山武ゐ拙ゝふゐるゝも心一致の御門下に責伏らゐ滅

亡ぶ及び候べきや況や此要害ふ拵籠り上人直の御頼をと候うん。
國々の門徒馳集り佛敵信長を亡ぼうん支掌の中ふ候ふと席を
拍て罵つゝ上人おれも頭を振せめい。ひる疎まの合戰や富樫
畠山の滅亡うを常ふ悲歎をるの最上なり其故い人を殺し門下を
死せしめ国郡を得て何うせん蓮如上人い吉崎ふ御堂を燒き
再回山科ふ本寺をいとなゝ又此ふ當寺を建立しめしふ宗風日
々ふ繁昌して今ゝ至まろ我德蓮師ふ及ばゞも爰を去て他
國ふ行再び御堂を建立せば宗門すゝろ退轉をべき唯々合戰ふ及
ばん支の悲しうをと御袖を顔ふ押あてめいさめぐと歎きあい
きい寄集つゝ門徒の百姓皆一同よゝろと泣出し。廣大慈悲の

御門主へ難題を申うゝ斯まゞ御苦勞をうけ奉る信長の悪さよ。
噛つくをを飽をゞ譬信長わ寄ゞも門徒の面く一黨し京
都へ逆寄し佛敵の矢先ふ命を落さば成佛得脱の縁なるべし。い
ざや討て登らんと聞く程ふ寺中大ふ騒ぎ立上を下へと混雜し。
恰も鼎の沸るが如し此時一座の坊官家老席を立て百姓を鎮め。
漸ふ座せしめうきい上人鈴木源左衛門を近く召き先ゝの議論
聞ゝ通ゝ紛々ゝゝて一決せゞ願くい足下の高論を聞んと西
ゝ鈴木重幸謹んで申うゝい誠ふ此度の一事ゝて當宗門の興廢
にゝゝゝ某つゝく考うふ信長ゞ所望辞退しめの時い渠怒て
軍勢を差むけ合戰ふ及ばんと是以て治定せう又上人以下退去

まゝ〳〵當石山を信長ふ與へゝ〳〵も是も亦合戰ふ及ぶべ〳〵其故如何とあまべ信長本願寺を怨を攻亡ぐんと思ふ子細三箇あり。原織田朝倉の両家ハ舊き恨をわるく數年鉾楯ふ及べり然るふ當寺ハ朝倉と因を結び患難相救ふと和親の交りあり。是信長が惡む一なり織田朝倉闘戰ふ及ぶ時加賀の門徒等朝倉ふ荷擔し織田方ふまゞが爲ふ敗走せ〳〵支少なるべ。是信長の惡む二なり。信長生得姦雄ハて強きを惡み賢あるを忌み威勢ある者を妬み位高きを凌ぐ。此故ふ當宗門の四海ふ弘まり日々夜々ふ繁榮ふるを。信長又暗ふ妬み其上加賀の門葉勢ひ強く當時北陸七州其半ハ本願寺の領とあまり。是信長が當寺を惡み嫌ふの第三なり去ふ依て疾本願寺へ軍勢を引率て向ふべき志あるもとハ〳〵も未ざ勢ひを得ざるが故ふ默止あきたり。今足利家再興を名として上洛し三日ら内ふ江州一國を伐鎮め。龍の池中を出るが如し此時ふ來て本願寺を切崩し日來の鬱懷を散ぜんと欲をまゞも人の議論せん支を憚るべく叶ひ難き所望を申ゝ辞退せば直ふ押ら也責潰さん若退散あゞ其備へをを討果さんを信長が胸中をまゞ疾ら見拔あきたり。左ハも右ハも道まるべき合戰ふ候へば當石山の要害ふ歃を引ゝ多法歃を亡がゝめべし御退去の儀ゆゝく然べるべ存候ふと詞をゞ〳〵述べるべ上人實もとや思ゝるん默然として

居ゐ。下間一家其余七里栗津の徒小躍して勇を立鈴木氏も軍算的當の妙論此上の評議有べからず。急ぎ信長へ不兼知の返答し。近國遠邦の門徒を集め。合戰の用意をべしと勢ひ含んで騒さるを重幸ちまを推鎮め。上人當寺辞退の趣を返答し給ふ。信長急ぎ押寄る事有べからそ其故い三好の一黨四國ふ潜り怨敵ゆまぐ滅亡せざ丹波ふ波多野の一族あり江州ふそ佐々木の餘黨。伊勢ふ北畠あり其外朝倉上杉北條武田を始め諸国の大敵虚を窺ふく相奪ふの時あるよ信長何の閑暇ゆ。そ外の豪敵を打捨あて本願寺へ責來るべき。假令信長一時の怒つるよ絶ざして軍勢を出さんと言ふども織田家原來謀畧の臣下多し。必ず諫めるむ。先和らるよ御返答候ふく。上人をすゝめ御門葉の面々枕を高ふ。両三年い心安く休まめくして返使の演舌ゐどつどくふ申舍め上人ふ暇をとひ紀伊国へそ歸るる。上人其余の坊宦家老も鈴木ゞ未前を察しる明智の程を感賞し。衆議此ふ一決し諸方の門徒等も暇を給ひ重ねて合戰も及びゐば其時こそ籠城を偏ふ頼むのよしを仰渡さまるふ門徒等委細畏り己ゞ様々八方へ分まるくそ歸るる斯一心ふ皈依ゐて事實ふ開山親鸞聖人の御廣德尊しと申も中々恩なり

松永偽つく織田家ふ諂ふ并久秀素姓の諸説

織田上総介平信長武威畿内を轟し八荒ふ振ひ大和大路東福禪

寺ふ本陣を居らゝ諸方の仕置と下知せゝ。既ふ畠山次郎高政ハ三好が爲ふ浪々せゝが一番ふ新将軍の御味方ふ馳参ゝ忠志とゝ且ハ本領ゐまいゝて。河内国高屋の城（古市郡）を賜ゝ又同国若江（若江郡）の城主三好左京大夫義継ハ先年前将軍義輝卿の御妹姫を賜ゝて婚結の身ゐまい正ゝ。公方家の御妹壻ふく先ふ三人衆松永と同意ゝて義輝卿を弑せんゝを謀ゝゝ時不忠不義言語ふ絶ゐゝを申述て更ふ一味せゝゝゝ共三人衆松永等種く欺きゝゝて。終ふ逆意ふ同心せゝめゐ然まゝも義継ハ此條を悔ゝ後ふ三人衆と一門の好ゝを絶て松永を味方として三人衆を討ん夏を謀ゝゝ。松永と合体せゝふ似ゝまゝども内心ハ先松永を



ゝて三人衆を討せ。ゝて後松永を誅せんゝと計りつるゝ故ふ前々ゝゝ新公方家へ密ゝ使を献ゝ。御味方ふ参るべき由を申ゐる程ふ此度も早々若江ゝ参上ゝて御禮を申上ゝゝ。信長ハ対面あゝく其志を賞せゝまぬ爰ふ亦大和国筒井（添下郡）の城主陽舜房法印順慶ハ父順昭ゝ織田家ふ交ゝを通ぜゝゝ家臣摂原右衛門光之を使者ゝゝ。将軍の賀儀を祝ゝ奉り信長の戦勞を賞ゝ。天下太平を賀ゝ。献物其品多ゝ。偖亦松永弾正少弼久秀ハ大和河内和泉紀伊の国々ゝく三十余万石を押領ゝ。大和国信貴山（平群郡）多門山（添上郡）の両城ふ一子右衛門佐久通と代るゝ在住ゝ。尚も大和一國并呑せんと謀りゐるゝ今般新将軍織田家の上洛を聞て

果心が幻術久秀を驚らしむ

松永彈正久秀多門山ふ在城の時果心居士と幻術を行ふ者あり閑暇の時いろ〻慰む一夜彈正我戰場ふ於て自刃を交るふ至つても終ふ恐るゝの心を動ぜず汝試らふ幻術を行ひて我を驚ろかしめよと果心さらば近習の人を遠ざけて一寸の刀りのみも持ゆるべ灯もけしめよと彈正果心ク言まふ隨ひ火を打ケて我一個座ー居ら果心

果心居士

松永久秀





ラを退くと忽ち月くく雨ち降て風蕭風ら然るふ何と彩く物ゆ〻く囂く氣ゆ〻く心細くさて遥ふ外を見ゆ〻ら廣樣に有む人あ〻ら見ら細く痩ふる女の髪長くゆらげゆ〻ら間近く歩ゆ〻ら彈正ふ對ひて大息つゞき苦ーげる声ーて今夜いと徒然ふやあ〻んとゆ〻を図い疑ふべくもあらぬ五年以前病死てあるぬ別きを悲ゆめる妻女ゆ〻ら彈正堪ゆ〻ゆ〻ら忽ち果心居士ゆ〻と呼ゆ〻ら件の女忽ち居士ゆ〻の声ーとゆ〻く是ふ侍るゆ〻とふ如何ゆ〻く彈正もあ〻んゆ〻ら元ゆ〻ら雨も降ぞ月も晴ゆ〻ら曇ゆ〻ら冷ゆ〻ら強気の彈正も是ゆ〻ら恐ゆ〻ると醍醐隨筆に見へき

原來智謀武勇不敵の古兵今年五十九歳なれば大敵を恐るゝあらん歟
ども前將軍を弑し奉る本人なり。されば新將軍なれば信長と
欺くべく無事を計るべしと思慮せしうべ信長ふ使者を立て樣々に
機を取つ。前非を悔るの趣を告げ叛逆の罪を三人衆ふ打覆せ數
陳謝し銘劍珍寶を捧げ其罪を侘ると信長ちまを快しとあらば。
渠い全く前將軍の御敵なり我今度上洛の本意い渠奴ど首を得
んと思ふ所なり。何ぞ是を免して其礼を受るの謂あしと怒らまるる
を木下藤吉郎諫めて曰く仰の趣き至極の道理ふ候へども渠
奴い頗る古兵にして軍ふ馴る者といひ殊ふ要害にて城ふ籠りて。
勇士も多く抱へつまい是を征伐あ給ふる數日を費やさるべし



其内ふ五畿内再び相疑あらく瓦の如くふ解土の如くふ崩まるべ三好
ど爲ふ力を添るふ似て太平の計略と申べうべ此度い彼老狸ふ欺
まるし休みく禮物を御受けるべく候ふ左あらば松永をも御免あり。
我々何の怖まるあるべきと安堵仕つらく猶豫の者ども一時ふ御味
方ふ馳加るべ候て。三五日の間ふ畿内平均仕るべし三好本国落行
候へども程なく切上り候ふべし其時松永三好ふ合体つしあべ弥ゆ
しき御大事にて候ひあん然るふ松永御旗本ふ候て。三好ふ隨ふ
者まるも心變て仕り候ふべと申勸めるふ信長も納得
あらく献物と納め使者ふ答つく松永を召まるべ久秀參上し
て御禮を厚くのべて後言上しる樣某和州ふ住国仕り國中大

概静謐ふ治り候へども。筒井順慶僧徒の身にて濫妨及び迫
邑と押領し合戰を企て候ふ支あるまじきに存らるぞ。何卒公
方家の上意を以て是を退治仕り候ばやと願ひ奉る。信長仰せら
るゝ。筒井い元來春日の氏人にて興福寺の衆徒に代々筒井の
庄の地頭職ふ任ぜられ大和国ふ於てい舊さ家系ある國民と惱て
程の支有べしとも思はれぬ。去ぬる国中平均静謐のうちとのべ。
追て朝家ふ奏聞して宣旨ふ任ぜられと宣ひ。松永此上ふ於ては
願ひ奉りと申上げ退出しける。其あとに木下秀吉し松永が
所望なりと御計ひ遊ばされと伺ひ奉れば信長うなづて何とや心
許なく思へるまゝ腚とせし返事いせざりしぞ汝ぞ思ふ所い如何とや



と仰られるふよって木下申上るやう松永公儀の威をうけ已が領
知を切廣ぐんと計る。侯智の突き支斯の如し。但し五畿内にて松永
と闘ふべき者筒井ぬしでい有べうぞ候ふ然まば松永ふ何とぞ国
中平均の計略を廻らし候へと仰せ出さる然るべし去ぬる筒井支い
程よく仰せ置るべくふく候ふ今ふて筒井へい別の御使を以て同く
国中平均の軍議を沙汰し候へと仰せ遣はる候ば松永い筒井と亡
ありさまやと思ひ筒井い松永を誅戮せばやと謀て候ひるん両雄相爭
ふて勝負分がたいらぐ大和国の支い御心安うるべく候ふ其内ふ五畿
内全く平均いし外ふい四國の三好の一黨根を斷枝葉を枯し山陰
山陽の諸將達まぐも遠く威風ふ靡き内い京都安穩の基とい

らゝ。朝家泰平の慶を賛し申べく候ふ。左ようの儀君の御威光天下
ふ翹さ七道一統の時いまゝと萬民安樂の歓びと唱へいべしと言
上あるゝまゝ信長大ふ悦喜あゝ。いくも計らひ者ゝ。是我意
ふ叶へて直ふ松永を召出さまゝ和州平均の事公方ゝも思召煩ち
ゝせらゝ処なり其方忠勤を励ましゝ騒乱を鎮むべし但筒
井しゝ公方家ふ殊なる勲功あまゝ。是と誅戮せらるべき謂なし去
あゝ國中静謐の計畧い匪分の力を盡さるべし若又人數不足あ
らん時い何時ゝくも加勢を仰付らるべしと有るふゝ松永面目を
施し歸国の暇を賜ゝ本國へ皈りゝ
和州諸將軍傳ふ松永久秀の先祖い播州の住ゝ。久秀佞奸辯
才ふして亨禄巳丑の冬十月十日二十歳ゝて三好長慶ゝ仕へ
右筆ゝゝ近侍して程なく執権となまゝ云又一説ゝい西国の土
民ゝしふ武藝を好ゝ諸國を廻り三好家ふ仕へ始い小卒なゝ
ゝゝ武勇智謀ゝゝ度々の功を累ゝ終ゝ一方の將となり
ゝと長慶取立ゝ我家の執事となしゝと云又陰徳太平記
ゝ久秀い摂州五百住ゝ生まゝ豊嶋ふ住し身の貪しゝと神峯山の
毘沙門天ふ祈ゝ泰詣しゝるふ折しも十二月九日神峯山ゝ
下向の路次ゝて續松をけし難義のゝゝ淀川淀ゝふ所まゝて葬
の火と得て是を松ふうつし且六道錢おゝひ供物を取へまゝて新
歳の儲とゝしゝるふ其欲ゝ鳴出るゝと云ゝ何まゝ是なる哉ゝゝ

松永が居城和州信貴山多門山等両所あるを一説ゑん信貴山の多門が城ゝて同所と心得ゝるゑん誤ゝり信貴山の城ハ和州平群郡ふあゝく當山の大衆ふ龍田龍野の社人等を加へ千余人ゝく在番せゝめ多門山ゝゑん東大寺の大衆ふ番勢八百余人を入置ゝ。

和州諸將軍傳ふ出

大和志添上郡條下ニ云。多門城趾在奈良坂村西、永禄中松永久秀築。天正中爲織田侯所陷。其營構鞏固多省功力世皆倣之謂之多門造云々

武用辨畧云多門今長屋ヲ以多門ト云或書ニ曰松永久秀多門ノ城ヲ築後世其構營ヲ摸トシテ往々城居ノ格ニ據テ今呼テ多門ト云蓋久秀ヨリ始辭也ト云云或曰長屋ハ本屋ノ外ニ長々連續スル家ナレバ也或ハ之ヲ小屋ト云大厦ニ對シテ云トヴ又陣小屋アリ

時ふ石山本願寺の使者東福寺の本陣ふ到来ゝて獻上物を呈謹んで申ゝるゝ今般信長公足利將軍家再興のゝめ御上洛あゝるゝ恐敵追討の便宜ふゝる石山本願寺の地ふ城廓を築き給ふべきゝ上地御所望の旨武家の御計らひ尤も有べき条御尤ふ候へゝも我宗門ゝ於てハ中興蓮如上人聖德太子の靈勅ゝよゝく開基あゝゝ有縁の勝地ゝて光佑顯加上人の諱ゝ計らひと以て他邦へ移ゝ候ゝん事叶ひゝゝ。嚴意恐ゝ入て候ゝく。此儀

御免許と蒙り度候との返答を演べ信長これを聞て大ふ怒り憎き鱗坊主めが申条くるたく聖德太子再來して建立せ〜寺なりとも信長が所望せんふ何条違背の有べき哉況や蓮如ごとの芋堀坊主が愚昧の道俗を誑〜太子の靈應を蒙り〜る〜偽て米錢を貪り建立せ〜本願寺なると信長が業應せを退去せまゞき条奇怪至極なり尓申に上り〜ゝ大軍を以て取こゝ火を放つく燒立べ〜坊主めゝ首を洗ふく相待べ〜と以外の氣色なきい本願寺の使者大きふ恐き頭をかゝく譬りに猫ふ追まゝ〜鼠の如く這々ふ逃歸まり此時木下藤吉郎御前ふつく信長を諫めく曰く御腹立御所理ふ候へども當時四方の敵



徒いまゞ服せゞ君興業の最初より坊主ぐ〜を相手として兵を動う〜給ふい詮なき事ふ候りゞ哉其窮ふ愚案を廻らをふ天下に覇業を爲さんと欲する者い先富を成をふ如べ〜チ富ざる時い謀略も施を支能ゞ威嚴もまく行られゞ軍令も正〜ゝ〜ゞ威嚴軍人令謀畧の三條行られゞ〜て敵を服する者未あゞ今四海内交乱ゞ兵革止ゞ故ふ諸國の大名悉く困窮せり其中ふ只一個富る者あり之を誰と思召候ふ哉彼本願寺光佐なり君ぢゞく怒りを押へ本願寺と睦まゞく因ゝり渠が金藏を以て織田家乃軍用ふあく天下を征〜强敵を亡ぶ〜興業全き時を待て只一蹈ふ本願寺を挫ぎ潰さんふ何の勞り候ふくき先京都平安なゝん

藤五郎洛中の
市店を騒ぐ
圖

藤五郎

御謀こそ肝要ふ候ふと憚るこゝろめく言上あるこそ。信長実もとて其
諫言ふ隨い本願寺の一條い打捨らまし先國中の仕置を夫々ふ仰付
らまし城々の沙汰まぐ残る所なく下知あるこそ則ち河内国の
事い高屋の城の畠山と若江の城の三好義継とあく半国づ所務に
べく摂津国い和田伊賀守惟政伊丹兵庫頭親興池田筑後守勝
正三人を將軍家直參の隨一と定めらまし国中の大小支を執行ふ
べしと申渡さん。介後畿内こそ繁昌の土地或い所領ある寺社等
へ將軍家御再興の段錢を分限ふ應じく差上申べく旨觸渡
さまこそる　段錢とい田地一段ふ米五升の課役こそ是を價錢こそく納めると
段錢とふ永禄十一年の頃い米一升の代八文二分余りなりとこそ
將軍本國寺ふ御動座信長清水ふ移陣并木下静謐の奇計



織田の軍勢五萬餘騎洛中ふ有て狼藉あん事も又こそ難く町
人等恐怖んこも不便なり且三好の殘黨こも來りて合戰おこば禁
裡間ちく恐まおさこも非ぞ洛外ふ陣セこまん支然ぐべここく洛
東清水こ陣ぐこく將軍義昭卿こい六條本國寺ふ入御しめい此と
假の御所と定められこる本国寺い尊氏將軍の叔父日静上人の寺
あまべ由緒ここい且い信長の本陣清水寺こも程遠ここ孫べ旁
ぐりこく將軍の御所ふ然ぐべここて斯いここひ給ひとこ余後
洛中洛外の住人等安堵の仕置と定めらまし軍勢の濫妨を嚴重ふ
禁しめめいこふこう萬民こぐめく太平喜悦の眉をひここ仁政
と仰ぎこる

太閤記云木下藤吉郎信長へ言上しるい武士と違ひ百姓町人い
權勢と以て押付る時い集つく蜂起し温和と以て教導せんと
あせい柔弱とあるゞる故ふ是と歸伏るゝしむる事甚うし愚
臣存つきゝる一儀あり御足輕の中ゝく其人躰を選を可様く
ふ計ひいで必定安堵ゝしゝそんと申るまべ信長尤と御許し有
そゝふゝり木下即ち足輕衆とえゝをゝふ鶴見藤五郎とくふ
者尾州津嶌の生うく丈高く骨太く髭多く荒々しき人相ゝ
上ふ力量あるく忠義の志も亦厚き者ゝまべ是を呼出し委く
謀畧を申ふくめ尤後ふ假ふ刑ふ行ふ支ありふしの恥辱を忍
びく堪ゆべし是全く国家の御爲ゝと。具々諭しるふ藤五



郎相心得て御受申木下ゝ許多の銀子を請取ゆて織田家の
印の付ゝる短衣と着し大小の刀をさし市中を徘徊し酒屋ふ
入くい酒を出ゝを出し様遅き時い散々ふ匂り酒いづまべ肴を好
き言條ふ隨ゝるまべい大ふ怒り。血鉢を打ゝき懐中ゝ金を出
しそ。價をつくのひ家内を騒がせゝるべ様々ふあつゝひて漸ふ其家
を出しゆまべ又二三町行く餅屋ゝいゝて悪行喰し其余具服
屋ふ間物屋をべて洛中の市店ゝくい無体の望ゝを言うけ或い店
の甲幹を打擲し種々の狼藉ふあべり諸人憎しゝい思へ共織
田殿の御内とくべ跡々の難義を恐まて皆侘言して濟せゝる。
斯のごく毎日洛中とあるまべ廻ゝるべい藤五郎を見くまべ皆

戸を閉て潛まり疫病神のごとく恐れ怖れ安き心いなかりし。四五日過て木下藤吉郎りくや鶴見の乱妨も洛中へ行しぐれつゝ浅野堀尾の両人ふ此計策を授け洛中を見廻るべしと有しゆゑ兼てふて廿餘人の士卒を召具し洛中と巡見し非常を糺す由を觸てし裝束嚴重ふ出立町々を撿察のしる程ふ町人も幸ひなりと悦び藤五郎が狼藉の次第を訴へるるゆゑ浅野堀尾の両人大ふ驚き奇怪の行状をなす者うる假令御家人なりとも非道の事爲べきふ非ず搦め捕て法度を糺すべし其爲るべく出勤をる所なり是まぐ訴へ出ざるゆゑ其方どもの怠りなりと詞半語ふ隣町の酒屋ふ荒破をる由を告る者あるとなり夫道すゝと士卒ふ命じ彼處ふいたりて忽ちふ藤五郎を搦め捕り引立て本陣ふ連歸り仝後藤五郎を高手小手ふいましめ洛中を渡し其上ふて三条河原ふ於て是を斬し高札を立ていはく此者足軽の身として洛中を乱妨し町家を騒動させ條以外の曲事なり糺明の上その科を定め洛中を引渡し三日のあいだ晒し死罪ふ行ふ者なりと記さるゝ洛中洛外の貴賤これを見て信長の政道ふ依怙贔員なく清廉の仕置なりと感嘆し扨て静謐ふ納りぬる木下暗ふ藤五郎ゐい銀子を多く与へゝそ約束の如く荒破せし且成ぐ恥辱を忍び支拔群の御奉公として急度忠義の一なり此上い尾州清洲

ふ飯ふ。暫く忍ひぐ蟄居ぐ。其内うい召出さるべ〜として人
ちまぢ京師と落〜ゑる。藤五郎い大ふ悦び有がゑ〜御褒美を
戴ぐ。去のんで清洲ふ歸ふゑる去程ふ木下ゲ智略ふゑゑく。洛
中の町人等信長の政道ふ私ゑく清廉の仕置正〜く專ら仁
愛と施〜給ふ事と悦び忽ち静謐ふなりゑるとぞ

繪本石山軍記初篇巻之五終